

ー0歳からの教育ー

アリスこどもスクール代表 野笹玲子

21世紀を迎えた現代に於いても、幼児虐待やいじめ、不登校といった教育や子育てに関する大きな社会問題は後を断ちません。それどころか次第に深刻化し増加の一途を辿っているようにも思えます。これらは大人の社会の歪みが一番弱者である子供に現われてきているのではないかと考えます。もっと身近なところに目を向ければ私の友人達の多くが今も公立小学校の教育現場で教師をしています。彼等の話を聞くと「最近の1年生は入学式の間も、座ってられない子がたくさんいる」というのです。そしてその理由を「これは子供が変わったのではなく、親が変わってきたから」と指摘しています。

要求や批判はするが、授業参観での私語や集まりに平然と遅刻して来る等、場のわきまえやモラルを欠く親達が増えてきていることを嘆いています。周囲への心遣いもなく、自分勝手な行動を平気で行う親を見て育った子供に、社会性や公德心が身に付いているはずはありません。「親の背を見て子は育つ」と言われるように、子供たちの変化は私達大人に責任があるのです。

もっと深く掘り下げていけば、近年の乳幼児を取り巻く環境の変化に起因するところが大きいのではないかと思います。

子供達を見ていると、同じもので遊んでいても各々がひとり遊びをしていて、友達と話し合ったり一緒に何かを作ろうとはしないのです。車社会になり、携帯電話やコンピューターの普及に伴い人と人とが触れあったり関わったりする機会が減少し、希薄になりつつある今日、子供同士のかかわりも当然少なくなっているのが現実です。その結果が自分本意な行動をとったり、周囲にすぐになじめなかったり集団からはみ出してしまう子供達を作っているのです。こうしたことから考えると、この乳幼児期すなわち「0歳からの教育」がその子供の人格形成や社会性の発達にとっていかに大切な時期であるかが再認識されます。

さて「0歳からの教育」というテーマについて考えるためには、子供を授かったと知った胎児の時期からのお話をすべきでしょう。胎児は既に聴覚が発達し始めますから、最初の親子のコミュニケーションはお父様、母様がたくさん話しかけてあげることです。

また優れた絵本の読み聞かせや美しい音楽をたくさん聞かせてあげることが知

能の発達に大きな影響を与えることは良く知られるところです。それだけでなく、こうしたコミュニケーションが誕生後の親子の信頼関係を築いていくのです。誕生後は、視覚や触覚といった感覚が次第に発達していきます。もちろん聴覚もさらに様々な音を聞き分けられるようになり、動くものを目で追ったり、気に入ったものを握りしめたりできるようになります。そして、立つ、歩くという身体の発達に伴い、色々なものに興味を示し行動範囲も広がっていきます。

こうした子育ての中で気をつけなければならないことは、おもちゃを与え過ぎないということです。ここ数年、先に述べた集団で遊べない子やおもちゃがあれば遊べるがないとどうしていいのかわからない子、そして遊びを作れない子供達、ものを創りだせない子供達が増えています。これは親や周囲の大人達が安易にできあいのおもちゃを与え過ぎていることがひとつの原因であると言われています。また次から次へと与えられれば、ものを大切に作る心やがまんする心も育ちません。0歳児でも立っていた茶筒が転がることを知るとそれを転がしながらハイハイをしてどこまでも追い掛けて遊びます。また、古新聞紙をやぶくことを覚えると、ビリビリという音を楽しみながらいつまでも遊んでいます。散らかしたことを叱るのではなく、片つけることを教えれば良いのです。

「なんでもやぶくようになりはしないか」と心配する前に何が良くて何がいけないのかを判断する力をつけてあげる。それが「育てる」ということだと私は考えます。つまりものを与えることが一番簡単で手っ取り早いことですが、そうやって手を抜いたことによって「育たないもの」と「失われてしまうもの」があることを心に留めておいて頂きたい。教育も子育ても手を抜いたら必ずそのツケが後から回ってくるのです。子供に考える力を育むためには、親が考えることを休んではいけないのです。満遍なく満ち足りていれば、だれとも譲り合うこともなければ順番を話し合う必要もありません。

そんな環境の中で社会性や集団性が育つ道理がありません。物質文明の弊害がここにあります。

今、教育学の中で最も注目されているのが Construction=ものづくり という考え方です。

自ら「何をつくろうか」と思考し「どうしたら」という手立てを導きだし創造してゆく過程で、失敗や挫折を知りそれを克服してゆける強い意志や精神力をも養い、達成の喜びを知ってさらなる目標への向上心が育ちます。

荷作りをしようと置いておいた段ボール箱の中に入ったり出たりして遊んでいるうちに、その中へ色々なものを持ち込んだり、次には箱の周りにひもをかけて引っ張って電車ごっこを始めたり、とうとう箱の底が抜けてしまったらキャタピラのように中にはいってパタパタと走り回る。ここに創造性が生まれます。

お友達と一緒に遊んだらもっと楽しいはずです。それを教えてあげて欲しいのです。

子供とは本来自分の中に考え出したり作り出したりする能力を持っているものなのです。それらを引き出さずにむしろ阻止してしまっただけではいませんか。ですから「0歳からの教育」はおもちゃに頼らないことです。お子様を常に自然の風や花や動物に触れさせたり、本の読み聞かせや音楽、絵画等を一緒に鑑賞しながら「きれいだね」「かわいいね」「すごいね」とお父様や

お母様の思いや感動を言葉に出して語りかけ「感じる心」を伝え育てていくことが、豊かな感性や感受性を養う第一歩です。また同世代のお友達だけでなく多くの周囲の人たちと親子共にかかわり協調していくことによって、人を思い遣る優しい心や自分で判断して行動できる力が育まれてゆくのです。

こうした様々な体験や経験をしている子程柔軟な思考と応用力が備わっていると言えるでしょう

この重要な乳幼児期を日々の慌ただしさに追われて漫然と過ごしてしまう親子と、「どういう子に育てようか」と両親で真剣に話し合い子供の将来へのビジョンをしっかりと持ち、そこに向かってどうすれば良いかを考えながら生活する親子とでは、自ずとその将来に違いが出てくるのは当然です。だからと言って、0歳から教室に通えば良いかというような短絡的な考えはしないでください。何より大切なことはお父様とお母様が自分達の大切な子供は自分達の手で育てていくんだという自覚と信念を持つことです。

教室に通わせていることに安心しては、自己満足にすぎません。前述のとおり、子育てに手抜きは禁物です。

教室や教師はあくまでその御両親のお手伝いをするものです。適切なアドバイスや教育の場を提供していきますから、その教室に通う目的を明確にし子供を預けるだけではなく御両親が学んでゆく姿勢を持って、上手に教室を利用していけば良いのです

但し、教育の原点は幼児教育にあると言われながらも、不思議なことに現在の日本では幼児教室に対する法の規制がなく、教育者や教職を持たない者でも経営者や先生になれるので、言わば無免許の医者に処方せんを出してもらったり、手術をされてしまうようなものです。教育は命と同じ重さを持っています。

大切なお子様をお預かりして「せんせい」と呼ばれることへの大きな責任の重さを私達教師は改めて噛み締め、本当にその信頼にお応えできる指導力と教師としての適性を備えているのかを、自分自身に問うてみるべきであると思います。

大切なわが子の子育てを、信頼して相談できる「本物の教師」を見抜く目と耳を持つことが「楽しい子育て」を実践する秘訣かもしれません。